

郭上清先生全集

第二十二卷

岩波書店

野上彌生子全集 第二十二卷 第二十回配本(全二十三卷)

一九八二年一月七日 発行

定価 三三〇〇円

著 者 野 上 彌 生 子
の がみ や え こ

発 行 者 緑 川 亨

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目十五番

電話 〇三三六四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目 次

メーデー見たままの記	三
寺田さんのこと	二
『婦人公論』の使命	一四
夏目先生の日記について	九
嶋中さんの思ひ出	三
床の間と鼻	二六
いつの世の契りぞや	三
ある午後の対話	三
むすび	元
河野與一氏の『プルターク英雄伝』	四一

旅の思い出に映ずるエジプト・ハンガリア	四
高濱さんと私	五
陳さんの名刺と手紙	六
「迷路」の会の記	六
一樹の蔭	六
ゲッテンゲン宣言をめぐる	七
中国作家協会に招かれて	八
初夢	八
ヒロシマに就いて	九
この年齢で思いがけなく	九
九十歳の夏目先生	九
人間の健忘症への警告	一〇
強靱な戦い	一〇
桜間弓川さんのこと	一五

私の散歩道	二七
皇太子の御成婚に思う	二八
フルシチョフ夫人のもたらした革命	二八
「うつほ物語」について	三三
山莊より	四〇
日本人の笑い	四六
能面閑話	四九
おたから	五四
気前のよいことかな	五七
山莊雑記	六〇
カギ十字と安保改定	六七
女神のオリヅ	七〇
鍋焼きうどんの経済	七三
宝生新先生のこと	七六

春 昼	一七九
米国行きの「ハラキリ」	一八一
「ワシントンと桜の木」	一八四
天網恢々疎にして漏さず	一八八
「不幸で幸いな」日に	一九一
一つの提案	一九四
〔室生犀星氏を迎えて〕	一九六
名前のいろいろ	一九七
ストレールカとペールカに笑われるな	二〇〇
暴力の根は深い	二〇二
宮本百合子さんのこと	二〇四
新人生へ	二〇七
結婚と人生	二一四
手	二二七

目 次

奇妙な暗合	三二
『海神丸』	三五
イキのよいお客さん	三八
むづかしかった銚衡	三九
卒業生のみなさんへ	四三
こだま	四六
完成の美と未完の魅力	四七
講演	五九
私の茶三昧	六二
名前の魔術	六六
三つの「哀傷」	六八
キリシタン大名の古跡	九六
ふしぎな漢文の学び方	一〇一
私と『アンナ・カレーニナ』	一二三

記録の断片……………	三六
栄えあるものに……………	三三
五篇を読んで……………	三三
武田さん……………	三五
田邊先生の御講義……………	三八
この頃ひそかに憂うること……………	三三
夏目漱石……………	三六
働く母親について……………	四〇
やまびこ……………	四二
清酒「宗麟」について……………	五一
諏訪渡り……………	五三
日記について……………	五八
はじめてオースティンを読んだ話……………	六一
いま何をなすべきか……………	六四

該当作品なし	三六六
初心忘るべからず	三六八
ベトナムの戦火に想う	三七〇
ヨーロッパの鏡に映ったアジアの姿	三八〇
『わが半生』	三八二
夏目先生の思い出	三八六
『なまみこ物語』の水際だった筆の進め方	四〇五
安倍さんのことさまさま	四〇七
夏目夫人のこと	四二五
エゴイズムの大掃除	四三三
後 記	四三五

評論・隨筆
五

メーデー見たままの記

メーデーの行進をはじめて見たのはもう何十年とむかしのことになる。その時分は上野公園で解散したので、山下の通りにむらがった群集に交つての見物に過ぎなかった。集会地からはかなりの距離を歩いて来たのであらう。みんなもうとぼとぼと疲れ、歌声どころではなく黙りこみ、女たちはほとんどまだ和服に下駄で、行列の間があくとちょこちょこ駈けだし、大勢くりだした顎紐の巡査が、まるでそれを追いたてて行く光景は、示威運動よりいっその悲しく、見るものに義憤を感じさせた。

戦後の日本の歴史的な脱皮とともに、著しく変化した最近のメーデーの行事に馴れた若いひとびとには、以上の話はなんとも奇妙でよそごとに見えるに違いない。しかし、一年ごとに盛大を加えて行く有様を新聞や写真で知るにつけても、私によみがえるのはあの打ちひしがれたような、それだけに訴えるところの多かったあの行進の回想であり、今年のメーデーに際して思いがけなくMさん、Iさんに誘いだされたのも、いまは争闘や、反抗の示威より、働くものの愉しい祭典になったと伝えられるメーデーの催しぶりが、あの日とどんなふうにかわったかを、親しく見たい念いからにほかならない。

あいにくの風雨であつた。今年はなおも暢やかに、家族づれのメーデーなる一日を作りあげようとした計画が、償いがたく邪魔されたのはいうまでもない。それでも悪天候を犯してあつまった七十五単産、二十五万人の参集者は（これは実行委員会の発表で、警視庁の調べでは九万五千人だという。こんな奇妙な差異こそ、いかにお祭であろうと、祝典であろうと、統一メーデーが当局にどう考えられているかを端的に示唆するものであらう）神宮外苑の広場を埋めつくした。もし五月晴れの日光に恵まれたら、思い思いに意匠をこらしたブラカード、風船、鉢まき、婦人団体のそろいのブラウス、ネッカチーフで、見たたす限りいちめんの花園に変じたに違いない。しかし遠い向側の絵画館の階段上までぎっしり詰まった群集が、どしゃ降りの雨、演壇の旗竿がへし折れたほどの強風にも凝然として乱れず、それが雨傘の拡がりでいっそう巨大にまっ黒な密集体になり、その間に、それぞれの巻かれたままの団旗がまっ赤な尖塔のように林立したところは、おもしろく威厳に充ちた美しさであつた。この感動にくらべれば、台上から拡声機を通じて流れて来る諸氏の演説や、決議文、宣言の読みあげは、風雨に紛れてただ空疎にしかびかなかった。これは私がびしょ濡れで、泥んこの道を知らない若いひとの背に助けられてやっと渡ったり、テントに辿りついても、風邪の心配をしながら落ちつかなかったのみではないらしい。正直に言って、この種類の演説や朗読でしんに胸を打たれ、頭を垂れるほどの衝撃で聴いたことは、残念ながら殆んどない。

残念といえ、メーデーは晴れときまつたわけのものではない。ことにこのごろの天候異変からす

れば、今日の風雨もありえないことではなかったはずである。それに対して万全の策が講じられていたであろうか。テントの不備や、通路の不整理のみではない。板と丸太で組まれた演台さえすこし危いらしく、あらたに綱をひっぱり張り廻して補強に努めていた。こんな光景がとくに私の注意をひいたのには理由がある。かかる大集団を対象としてことをなすには、それこそ微に入り細にわたっての準備をゆるがせにせず、急に雨になろうが、風が吹こうが、もしくは火が飛ぼうが、槍が降ろうが、びくともしない鮮やかな統率を見せて貰いたい期待が強いからである。これは言い換えれば、メーデーの最近の不幸な歴史の一ページとなった二重橋まえの事件とでも、もし厳しい賢い統率と指導が、あの広場で包囲しようと待っていた警官隊に手際よく肩すかしを喰わしたら、避けえたのではないか、といまだに捨てえない疑いに繋がるのかも知れない。

ついでに、もう一つここで感じさせられたことを白状しておきたい。大きな地球儀や、白い平和の鳩や、赤い大旗で装飾された台の上は、組合の役員でも、来賓でも、重だった少数のひとつの席と限定されていたらしい。馴れない私は、そんなこととははじめは気がつかなかった。Mさんが登って見ましょうというので、迂り台のような急傾斜の板に、わずかに足がかりの横棧をつけた階段の手摺りにしがみついて、ずぶ濡れになって這いあがった。正面の絵画館まで、外苑いっぱいに充満した群集を一望におさめられるのはそのみであるから、Mさんは私にそれが見せたいのであった。しかし、上り口に二分と佇まないうちに、なにかの組合の手拭で鉢巻をした小柄なジャムバーの男のひとが寄

って来て、普通のもののはあがってはいけない、と拒まれた。Mさんは総評のなんとかさんに聯絡してあるのだといい、『世界』のものだといったが、雑誌の名前も一向利目がないらしい。それよりなんとかさんから、そこに登る資格の記章を貰うのが一番よかったのだが、混雑で探しだせなかったのである。しかしそのなんとかさんの代りに、思いがけずS氏にお逢いした。S氏はこれも鉢まきの某氏をひきあわせて下すった。私たちの立ち話ですむと、さっきのジャムバーの男のひとがまた近づいて、今度はまえより強く迫まった。まったく私たちがわるいのである。私は詫びながらも一度危い階段を、迂り落ちないようにまえの通り手摺りにしがみついて降りつつも、思わずにこにこした。ジャムバーの小男の、どこか一克者らしい顴骨の高い顔つきと言葉の調子には、メーデーを行うなら神宮外苑でやれ、皇居まえ広場には決して入らせないと主張する役人らと一脈相通ずるもののあるのがおもしろかったのである。このあとでMさんはやっとなんとかさんを見つけだした。私たちは記章をもらって胸につけた。でももうテントから動こうとはしなかった。

第二十六回メーデー宣告で会は終り、勇ましい花火の轟きとともに行進がはじまった。東、西、南、北、中央と五つの地区に分散して行われるので、私たちは中央のコースを舐んでいっしょについていくことにきめた。

行進隊は雨傘の行列であった。おのおのの団体旗も、掲げているよりは何人かで横にぶら下げたものも多く、趣向をこらしたブラカードも濡れて紙がはがれ、インクや墨のいろいろ乱れ、中には粹だけ

になっていた。歌声もあまり起らなかった。どの部分かで歌いだしても長くはつづかず、冷たい雨に打たれつつ、また四つ角ではゴー・ストップの信号で列を中断されつつ進むのであった。いったいに集団行進においての日本人は、西欧人がこんな場合に一般的にもつ芝居気のある歩き方をしないから歩調がそろわないと評される。それが雨で今日はことさらに著しく、てんでんまちまちなもの佻しげに足を運んでいる恰好であった。二十数年前の、上野の山下での打ちひしがれたようなメーデーがかえって感動的であったように、こうして悄然と濡れて行くひとびとの姿には、ただ自動車の窓から見送るのがなんとも不遜で、高みの見物のような後ろめたさを感じないではいられなかった。私はまえのシートのMさんに声をかけ、どこかで赤いきれを買ったら、と提案した。それを自動車に掲げること、せめて仲間入りがしたかったのである。私の希望には都合のよいことがまもなくおきた。順次に進んで来た行列がちょうど出版組合になり、岩波の店からの参加者が近づいて来た。若い人たちは歓迎の叫びとともに自動車から飛びだした。向うでも傘の下から手を振り、笑い、叫び返した。この愉しい邂逅で、風呂敷ほどのひろいまっ赤なきれが二枚手にはいった。今日お天気さえよかったら、店のMさん、Iさんの仲間はそろいの純白のブラウスに、この赤いきれで頭をまくはずであったという。きれの一枚は、運転手台の外のガラス窓に結びつけられた。吹く風と自動車の速度につれて、それは快走艇の前檣帆のようにはためいた。雨に煙る新緑の街路樹に照りはえ、俄づくりの赤旗はいっそう鮮美であった。いままではすれすれに動いて行っても無視された自動車が、はじめて行列から歓